

はる事わいな」

「綺麗なやろ、あれは皆^{くろせ}玄人^{くろせ}や」

「色は白^{しろ}いで」

「違ふ、でゝる^じ妓^じや」

「皆、船の中へ這入つてはる」

「違ふ、褌を持つてる人^{ひと}や」

「何も持つてはれへんがな」

「解らん男^{おとこ}やな、藝州^{ぎしゅう}やがな」

「ア、そうか、そんならそうと云ふてくれたらえゝのに、玄人^{くろせ}やの、でゝる^じ妓^じやの、褌を持つてる人^{ひと}やの云ふよつてに解らんねんが」

「甚いおかしいな、玄人^{くろせ}やでゝる^じや褌を持つてるが解らんに、よう藝州^{ぎしゅう}が解つたな」

「そら解るがな、廣島^{ひろしま}の人^{ひと}やろ」

「まだ解つてないがな、廣島^{ひろしま}の人が船に乗るかいな」

「蠣船^{かきふね}のおばはんは」

「理屈を云ひないな」

「藝州^{ぎしゅう}て何ん^{なに}や」

「藝妓^{ぎぎ}の事を、洒落^{しやれ}て藝州^{ぎしゅう}と云ふねん」

「藝妓^{ぎぎ}を洒落^{しやれ}て藝州^{ぎしゅう}か」

「そうや、氣の利いた若い者が、あの人藝妓^{ぎぎ}やてなモツ○。○チャリした事が云へるか、源^{げん}さんなら源州^{げんしゅう}、金^{かね}さんなら金州^{かねしゅう}、萬^{まん}さんなら萬州^{まんしゅう}てなもんや」

「成程……あの藝州^{ぎしゅう}の隣^{となり}に座つて居るのん、あれ藝州^{ぎしゅう}の芽生^{めう}へか」

「芽生^{めう}へと云ふ事があるか、あれは舞妓^{まいぎ}や」

「播州^{はりしゅう}の」

「違ふ、舞を舞ふので舞妓^{まいぎ}や」

「今舞ふてえへんが、まわん妓^ぎか……妙な頭^{かぶ}を仕てるな」

「あの頭^{かぶ}を京風俗^{きやうふうぞく}と云ふて、鬘^{びん}をふくらすのんや」

「派手な着物を着てるな」

「あれが友禪^{ゆうぜん}や」

「あれが幽霊^{ゆうれい}か」

「友禪^{ゆうぜん}や」

「長い袖^{そで}の着物^{きもの}やな」

「あれが振袖^{ふりそで}と云ふねん」

「別に振つてえへんが」

「振らんでも振袖^{ふりそで}や」

「あんな袂^{たもと}へ南京豆^{なんきやうまめ}を入れたら喰ひ悪い^{くひわるい}やろう」

「舞妓^{まいぎ}が振袖^{ふりそで}へ南京豆^{なんきやうまめ}を入れて喰ふかゐな」

「入れへんが、もし入れたら喰ひ悪い^{くひわるい}やろと云ふねん」

「そんな物^{もの}を入れへん」

「ほんならあの舞妓^{まいぎ}はまあ州^{しゅう}と云ふねんな……あの丸髻^{まるげ}に結ふてるのは」

「あれは仲居^{なこうぢ}や」

「今立つたが短いがな」

「誰^{たれ}が長いと云ふた、仲居^{なこうぢ}や」

「そんなら仲州^{なこうしゅう}か、あの隣^{となり}に居る男^{おとこ}は何者^{なにもの}や」

「何んや盗人^{たうじん}みたるに云ふて、あれは帮間^{ばんかん}や」

「あれ羊羹^{やうきやう}か」

「羊羹^{やうきやう}やない、帮間^{ばんかん}とは太鼓持^{たいこもち}や」

「夜番^{よばん}の」

「違ふ、男藝者^{おとこぎしや}、帮間^{ばんかん}、太鼓持^{たいこもち}、男で男の機嫌^{きげん}を取ると云ふ仲々^{なつか}六ヶ敷^{むつがしき}い商賣^{しょうばい}や、手輕^{てかろ}ふなつて、餘程^{よほど}角^{かく}がとれんと出來ん仕事^{しごと}や」

「輕石^{かろいし}みたいな、此方^{こなた}に紺^この筒袖^{つつそで}を着て端絞^{はなぢり}りの前掛^{まへか}を仕てる男^{おとこ}は」

「あれは板場^{いたば}や」

「風呂屋^{ふろや}で物を盗^{ぬす}るやつか」

「それは板場稼^{いたばか}ぎや、板場^{いたば}とは俗^{ぞく}に云ふ料理人^{りやうじん}や」

「何^{なに}や知らんけれど先刻^{さきさつ}から見ると、汁^{じゆ}を吸^すふたり物を喰^くふたり仕^しとをるで」

「あれが商賣^{しょうばい}や」

「飲食屋^{おんじきや}か」